

自由民主党 翡翠会 行政視察報告書

*** 報告者**

幹事長 前田孝雄

*** 視察研修参加議員名**

前田孝雄、宮利徳、石井美季、早坂政芳 計4名

*** 視察研修日程**

令和7年1月29日（水）～1月31日（金）の2泊3日

*** 視察研修項目**

1月29日（水） 茨城県小美玉市 四季文化館みの～れ
『文化事業への住民参画について』

1月30日（木） 栃木県佐野市 佐野市役所
『部活動の地域移行について』

1月31日（金） 栃木県宇都宮市 教育センター
『デジタル適応支援教室「U@りんくす」について』

視察研修先 茨城県小美玉市 四季文化館みの〜れ

視察研修項目：文化事業への住民参画について

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

* 名刺・写真・資料等 *



視察研修先 栃木県佐野市 佐野市役所

視察研修項目：部活動の地域移行について

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

* 名刺・写真・資料等 *



佐野市役所

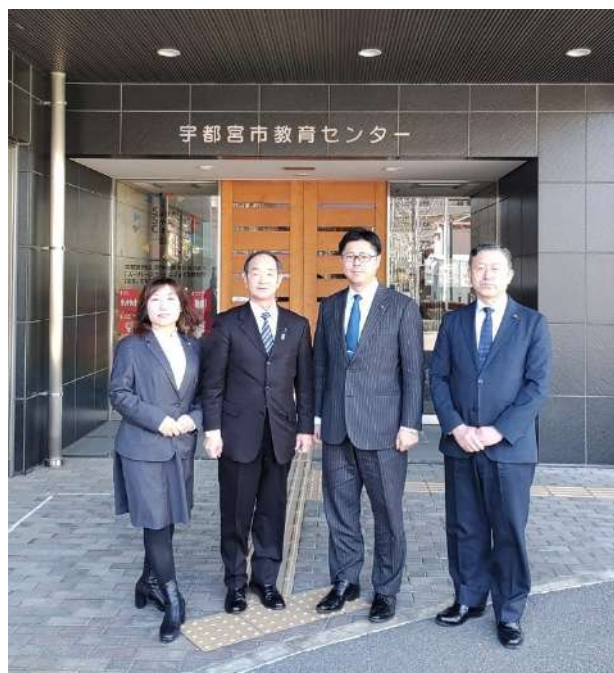


視察研修先 栃木県宇都宮市 教育センター

視察研修項目：デジタル適応支援教室「U@りんくす」について

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

* 名刺・写真・資料等 *



視察研修先・小美玉市

視察研修項目・文化事業への住民参画について

報告者・自民党議員団翡翠会幹事長 前田孝雄

1 全 般

小美玉市は令和7年1月1日現在、人口46,965人、恵庭市より約2万3千人程少ない市でありながら、「ダイヤモンドシティ小美玉」をキャッチフレーズに、四季文化館みののーれを拠点として、様々な住民参画のコミュニティ事業を進められております。恵庭市には、文化を発信する施設、文化について語り合う施設が有りませんが、まちづくりのため拠点となる施設の存在が如何に重要か勉強させて頂きました。



<小美玉市教育委員会職員等>

2 視察に当たっての教訓事項

(1) 良かった点

- ① 96枚ものパワーポイント資料を、全く飽きさせない内容かつ説明で時間通りに終了したプレゼンが素晴らしかった。
- ② 四季文化館みののーれの各施設が市民に寄り添った市民ニーズに合った魅力ある施設
 - ・ 来場者の使い勝手の良いトイレの作り、特に女性用トイレの数の多さに驚いた。
 - ・ 文化ホール600席がニーズに応じて半分に仕切れる仕組み、また、ステージが広くパフォーマーには最高の舞台であった。

(2) 四季文化館みののーれ誕生までの厳しい道のりの克服（建設反対者の壁の克服）

- ① あえて波風を立てて、反対者を取り込み、共にまちの未来を考えた。
- ② 語りだす人を増やし、みののーれが出来る前から、企画をガンガンやり始めた。
- ③ 10人の四季文化館企画実行委員会の下、262人から成るみののーれパートナーズ

3 本市に反映すべき事項

(1) 「対話の文化」によるコミュニティ活動の推進

- ① 徹底した住民参画による、まちづくり人材育成⇒まちにマジになる人を増やす。
- ② コミュニケーション5つの方法：おしゃべり⇒会話⇒対話⇒会議⇒議論

(2) シビックプライド（地域社会に貢献する意識）＝ 郷土愛 ＋ 当事者意識

- ① 5年後10年後のまちの姿を「自分事」として考え、シビックプライドは、自己肯定感を高め、幸福感も高まる ⇒ 自治体の究極の目的、住む人が幸せを感じるまちづくり
- ② 四季文化館みののーれの拠点が在ることの重要性について
 - ・ 文化施設が住民の手にあり、地域を語る場となり「行政の文化化」が図られた。
 - ・ 文化芸術を扱うことにより、対話の文化を育む拠点となり多くの人が繋がる。

(3) 芸術文化を語る会が発足したが、発信や語る場が無い。旧学び館の更地が決定したが駅前通りの賑わいづくりの為に、3年5年先を見据え、小規模文化拠点施設を構築

視察研修先・佐野市

視察研修項目・部活動の地域移行について

報告者・自民党議員団翡翠会幹事長 前田孝雄

1 全 般

佐野市は令和7年1月末現在、人口111,718人、恵庭市の約1.6倍ですが、「こどもの街宣言」をされ、子ども達の育成のため、部活動の地域移行に関しまして部活動地域移行推進計画「佐野モデル」立ち上げ、先行的に取り組んでおられました。

国の具体的な活動指針がない中、①生徒のスポーツ機会の確保②職員の長時間労働の解消③部活動地域移行を核として地域スポーツ活動の更なる推進を目指すとする目標の確立が素晴らしかった。



＜長浜議長他教育部の職員等＞

2 視察に当たっての教訓事項

(1) 良かった点

- ① 部活動の地域移行に関する現状の把握・分析がしっかりとされている。
 - ・ 少子化の影響と価値観・ニーズの多様化、教員の大きな業務負担
- ② 生徒のスポーツをする機会の確保を重視し、国や県の不確実なガイドラインの中で、先ず実行を決断し、佐野市部活動地域移行推進計画「佐野モデル」を策定
 - ・ 生徒のスポーツ・文化芸術活動の機会の確保
 - ・ 教員の長時間労働の解消及び地域スポーツ活動・地域文化芸術活動の更なる推進

(2) 課題に対する多種多様な改善策

- ① 休日の活動の半分を地域クラブ活動に移行（月2日程度、年間20日）
- ② 学校と地域クラブの運営団体と密に連携し、活動方針・活動状況、適切な生徒理解
- ③ 学校部活動と地域クラブ活動を併存させながら、生徒の活動機会を保障していく。

3 本市に反映すべき事項

(1) 部活動の地域移行するための体制の強化

- ① 思考停止することにより、地域以降が遅延するため、地域移行体制の速やかな整備
- ② 国、道からの指示の待ち受けではなく、段階的な移行スケジュールの策定・実施
- ③ 学校、スポーツ協会、スポーツ少年団等の移行のための多くの協議の場を設定

(2) 部活動の地域移行のための屋内外スポーツ環境の整備

- ① 11万人都市佐野市、総合運動場に第2種の陸上競技場を有し、先ず陸上部を全校合同で実施、本市も2～3年かけて陸上競技場の整備に合わせ計画的施設整備の実施

(3) 個別具体的に推進している「佐野モデル」を模範に、先ずは、実行あるのみ。

視察研修先・宇都宮市
視察研修項目・デジタル適応支援教室「U@りんくす」について
報告者・自民党議員団翡翠会幹事長 前田孝雄
1 全 般 宇都宮市は、令和7年1月末現在、人口511,957人の中核都市であり、2022年の調査で全国50万人以上の都市27市の中で、住み良さランキングが第3位、財政健全度ランキング第4位と素晴らしいまちづくりをされております。現在小・中学校の児童・生徒の不登校の増加が社会問題となっておりますが、デジタル適応支援教室「U@りんくす」は、不登校の子ども達の居場所を確保し「学びの機会」を保障する素晴らしい事業でした。 <宇都宮市U@りんくす職員等> 2 視察に当たっての教訓事項 (1) 良かった点 ① 「U@りんくす」の由来：U：宇都宮、あなた（You）と@アットホームな、links つながるを合わせて「あなたとつながるアットホームな場」に感銘 ② ブリーフィングに合わせて、ホームルームのライブと職員の現場を確認できたこと ③ りんくすに参加している児童・生徒とご父兄の感想に不登校対策成果が伺えた ④ 「U@りんくす」利用までの流れが簡明であり、分かりやすい。 ・ 児童生徒及び保護者が、説明会動画を視聴する。 ・ 保護者が正式に申込を行い、ウエルカムセッションを予約する。 ・ ウエルカムセッションに参加後、りんくすへの利用が可能 ※ 教育センターでの相談は不要、利用開始時には、教育センターから学校に連絡 ※ ウエルカムセッションでは職員との顔合わせや、操作説明等をオンラインで実施 (2) 課題に対する対策等 ① 指導要録上の出席扱い要領 学校長の判断で「指導要録上の出席扱い」になる様児童生徒の活動状況を学校と共有 ② 今後の児童生徒の利用状況等を踏まえて、適宜活動の見直しを行う。 3 本市に反映すべき事項 (1) 本市の不登校の現状と対策 ① 不登校児童・生徒数、令和元年101人（小学生16人、中学生85人）、令和5年228人（小学生61人、中学生167人）の約2.3倍に増加 ② 本市は、学びたい時に学べる環境を整備とあるが、具体的に児童・生徒に働きかける支援体制と「U@りんくす」の様な子ども達に寄り添った学習支援・体験活動が必要 (2) 仮想空間（メタバース）を活用したデジタル適応支援教室実施の検討 ① 「U@りんくす」のメタバース使用料は、年間60万～90万円なので財政負担は大きくない。課題なのは、担当職員5名（指導主事1名、県費教員2名、SC2名、ICT支援員1名）の確保である。 ② 人との繋がりを実感しながら、将来の「社会的自立」を育む事業の前向きな検討

視察研修先・茨城県小美玉市 四季文化館みの〜れ
視察研修項目・文化事業への住民参画について
報告者・宮 利徳
* 議員個々の考察と見解 * ●小美玉市の概要 人口48,000人、ダイヤモンドシティ（一人ひとりの可能性はダイヤモンドの原石） シティセールス、乳製品（ミルク、ヨーグルト、プリン等）、ニラが特産 多くのクリエイターが事業に参画 乳製品による乾杯を推進する条例・・・研修冒頭に飲むヨーグルトで乾杯 ●対話の文化を育む拠点 ・市内に3つの文化館を有する ・「対話の文化」とは あまり親しくない者同士の価値観や情報のすり合わせ ・縮小する未来において何を遺すかの合意形成を図り納得感を生み出すのが重要 ・徹底した住民参画によるまちづくり人材育成 ●みの〜れ設立まで ・企画当初は無謀と言われ、批判に晒された → 財源、稼働率、愛好家のもの、優先度 作戦① あえて波風を立てる ・反対する人は真剣にまちづくりを考えている人 → シンポジウムによる対話の実施 作戦② 語り出す人を増やす ・施設ができる前から、企画をガンガンやったら → 10代〜20代、他市町村の参加者が増加 ・住民がお金を出して「文化みの〜れ物語」を出版 2002年 みの〜れ誕生 事業費 29.7億円・・・インフラの一つと捉える ●進化する住民参画 ・住民参加・行政主導 → 住民参画・共創 → 住民主体・行政支援 ・芸術文化無関心層・未経験者層、文化施設支持層へのアプローチ （関心層だけへのアプローチではダメ） ・シビックプライド = 郷土愛 + 当事者意識 住民が幸せを感じるまち

●なぜ公共が文化芸術を扱うのか

- ・ どうかや人を育て、心を動かす力があるらしい
(地方創生、SDGs、シティプロモーション、地域経営)
- ・ 住民自治の域といえる状況

●アピオス改革 大ホール稼働率 14.7% (H20年度) 1ヶ月で3.5日の稼働

- ・ 活性化チャレンジプロジェクト (改革案を住民参画で練り出す)
①愛称募集 ②オリジナル企画の創造 ③機能改善
- ・ 3年後の稼働率が78%に

●ダイヤモンドシティ・プロジェクト

- ・ 小さく美しい玉 (宝石) = ダイヤモンド
- ・ 原石を見つける → 本当の価値になるよう磨く → 価値に気づくよう光を当てる
- ・ ダイヤの原石はダイヤでないと磨けない 大人がダイヤにならなくちゃ

●全国ヨーグルトサミットの開催

- ・ 青年層49名 (8チーム) が企画
- ・ 全国108種類のヨーグルトが集結 2日間で39,000人の来場

●ヨーグルトサミット後のシティプロモーション

- ・ ヨーグルトサミットを契機に市民チーム (Omitama Times) が「勝手に」魅力を配信

●みの〜れ改革

- ・ 対話と決断 納得感のある結論を出すことが必要・・・そのためには
①チーム全員を当事者に
②チーム全員が最上位目標で合意すること
③チーム全員で目標を実現する手段を決めてもらうこと
- ・ 住民の主体性をアップするための制度改革
- ・ 毎年14住民プロジェクトがプレゼンを行い、住民委員が評価

【所見】

小美玉市は文化事業を通して、住民参画・対話の文化の醸成・人材育成・シティプロモーションなど市全体の活性化を進めている。今回の研修では特に、

- ・ 住民参画は進化する・・・住民参加 → 住民参画 → 住民主体
- ・ 対話は あまり親しくない者同士の価値観や情報のすり合わせ
- ・ 公共が文化芸術を扱う理由 (人を育て、心を動かす力がある)
- ・ 決断時には納得感のある結論が重要 (全員が最上位目標で合意する)

などが印象に残った。

今回の研修では今後のまちづくりを進める上での住民参画の考え方について大変参考になることが多かったため、今後の恵庭市にどのように取り入れていけるのか検討していきたい。

視察研修先・栃木県佐野市 佐野市役所
視察研修項目・部活動の地域移行について
報告者・宮 利徳
* 議員個々の考察と見解 * ●佐野市の概要 人口 11万人 2005年2月 (旧)佐野市、安蘇郡田沼町、葛生町が合併し現在の佐野市となる。 ●市立中学校・義務教育学校の概要 ・中学校 6 校 義務教育学校 2 校 生徒数2,695人 (R6.5現在) ・部活動の加入状況 運動部 71.0% 文化部 17.2% (約 9 割が部活動に加入) ●地域移行についての国・栃木県の動向 ・働き方改革を踏まえた部活動改革 (R2.9) ・各検討会議からスポーツ庁、文化庁への提言 (R4.6 R4.9) ・総合的なガイドラインの作成 (R4.12) ・とちぎ部活動移行プラン (R5.3) ・栃木県学校部活動及び新たな地域クラブ活動のあり方等に関する方針 (R6.3) ●佐野市の取り組み ・地域部活動推進事業 (R3年度～R4年度) 田沼東中学校 休日の部活動を学校 (教員の指導) から切り離し、地域のスポーツ団体に運営を委託 運営団体: 特定非営利活動法人たぬまアスレチッククラブ (TAC) 活動日: 月 2 回程度 土日いずれか1日のみ、概ね3時間程度 対象: 休日に活動する全部活動 (部活動間の差をなくす) ・部活動地域移行推進事業 (R5年度～) 対象を 2 校に (あそ野学園義務教育学校) 陸上の施設が充実 R6年度から対象を 3 校、R7年度からは全中学校・義務教育学校を対象に ・佐野市部活動地域移行推進協議会の設立 (R5年度～) ●NPO法人たぬまアスレチッククラブ (TAC) について ・設立 H20.2 会員は565名 (子ども291名) ・23のスポーツ講座及びクラブ活動等 他に文化活動 (和太鼓、算数教室) ・R3年度から、佐野市立中学校・義務教育学校の部活動地域移行を担う (指導員 12名/40名) ・スポーツ以外の指導者はTACが探して依頼する

●地域移行推進計画『佐野モデル』

- ・基本目標、活動目標（市内全校のすべての部活動を移行）、佐野モデルが目指すもの
地域クラブ活動・・・社会教育の一環、運営主体は総合型地域スポーツクラブ
学校部活動・・・学校教育の一環（教育課程外）、運営主体は学校
- ・先生が指導者になることはできるが、実際はほとんどいない
- ・委託費は国費、将来的には受益者負担に（課題）
- ・保険も別途加入（市負担、学校活動ではないため）
- ・地域クラブ活動と学校部活動の併存
- ・単独行実施型、合同実施型、全校一斉実施型を組み合わせた効果的な運用
卓球と吹奏楽以外は合同実施型（卓球台の数、楽器の移動）
- ・地域クラブの運営体制 今後は地域のスポーツ団体等に委託することを検討
- ・指導者について
 - ①指導者の確保・・・市教委と運営団体で連携して確保
 - ②指導者の資質向上に係る取り組み・・・佐野市・市教委による研修
 - ③教職員の兼職兼業について
→ 意思を十分に尊重、公務への影響や健康状況を勘案し市教委が許可
- ・運営費用：R7年度までは市負担、R8年度以降は運営費の一部を保護者負担へと検討

●成果と課題

【成果】

- ・地域移行に関するノウハウの蓄積（実践を通じて方法を改善）
- ・教職員の負担感の軽減（時間外勤務の縮減は月6時間程度と不十分だが、土日連休が取れるのは大きな成果）
- ・活動内容の充実（適正な規模で専門的な指導者の指導を受けられる）

【課題】

- ・運営体制の整備 ・部活動との連携、大会参加の在り方の検討
- ・指導者の確保（量と質） ・学校施設の管理体制の整備
- ・佐野モデルでは希望する部が学校にない場合の対応が不十分
- ・保護者の費用負担（持続可能な運営）

●ビジョンの明確化（何を目的とし何をを目指すか）

推進する理由は様々あるが、最終的には子どもたちの活動機会と質の確保を第一に

【質疑応答】

- ・実際の運営費用 R6年度 TACへの委託料は800万円（謝金、交通費）
しかし予定した指導者を確保できずに予算を執行できない可能性あり
R7年度は2000万円 基金の設立を予定
- ・スタート段階で課題がクリアできていない中でのスタート
→まずやってみよう、やりながら課題を見つける 教職員の誤解もあった
- ・平日は教員、休日は指導員となっているが指導者間の連携は（教員の学び）
→アプリを利用し指導者間の連携、生徒・保護者との情報共有（実際はLINEも）

視察研修先・栃木県宇都宮市 教育センター

視察研修項目・デジタル適応支援教室「U@りんくす」について

報告者・宮 利徳

*** 議員個々の考察と見解 ***

「U@りんくす」について

●支援イメージ 支援を受けたくても家から出られない児童生徒の支援

- ・ 1 週間の予定表を提示し、児童生徒が自主的に活動に参加
- ・ 1 日 20～30 人が参加
- ・ 自己決定を重視 自分なりのスケジュール

●学びの機会の保障

- ・ 動画コンテンツを活用してリアルタイム以外の対応
- ・ AI 型学習ドリルの活動
- ・ コミュニケーション力の育成

●将来の社会的自立を目指した支援

- ・ オンライン社会体験
- ・ オンライン体験活動 → オフラインの体験活動
- ・ 大学・専門学校との連携
- ・ 市内の全ての児童生徒が同じコンテンツに参加できる

●心と繋がりサポート

- ・ スクールカウンセラーとの面談
- ・ ホームルーム（りんくすタイム）

●実際の活動

- ・ りんくすタイム（ホームルーム）
- ・ 日替わりのライブ配信 やりたいことを自分で探し学びの楽しさを教える
- ・ 屋外からのライブ配信 宇都宮の様々な人・場所を活用
- ・ りんくすフェスティバル
- ・ オフ会（野菜を植えよう、動物園に出かけよう）
- ・ 定時制高校、通信制高校、サポート校に係る合同説明会

●今日の活動の振り返り（振り返りシートの記入）

- ・ 振り返りを学校長が確認し出席扱いを判断
- ・ シートの記入がなくてもログイン履歴を確認

●U@りんくすスタジオの設置（支援員のライブ配信）

- ・りんくす（スタッフ）指導主事1名、小中教員 各1名、ICT支援員 1名、臨床心理士 1名

●学校用ではなくビジネス用のメタバースを活用、教員とセンター員が編集

●その他

- ・費用について 月5～6万円程度
- ・U@りんくすから学校に登校につながっている
- ・市単独で実施することで地元の企業や人とのつながりを活用できる
（広域で行うと地元とのつながりが難しい or できない）
- ・アバターでは相手の気持ちが分かりにくいので支援員は慎重な対応
- ・子ども、保護者への細やかな説明対応
- ・初めは24時間開放していたが、見えない時間のトラブルや不安を無くするため、R6途中から時間制限を設定
- ・保護者同士のつながりが出来る
- ・運営会社：OVICE（オビス）

【所見】

近年急激に増加している不登校への対応については恵庭市においても実施をしているが、実際の支援教室に登校できる児童生徒は決して多くはない。現在全員に貸与しているタブレットPCを活用したメタバース空間での適応支援教室は、自宅から参加することが可能であり、アバターを通してコミュニケーションの練習にもなっている。そこから少しずつ自信をつけ実際のオフラインイベントへの参加につながっている実績を確認できた。

費用についてもやり方によっては少ない予算で実施できる可能性もあり、是非とも導入に向けて取り組んでいきたい。

その際に十分に検討しなければならないのは、単独実施（近隣自治体との共同も含む）か広域（北海道など）での共同実施かという点である。単独もしくは近隣との合同実施の場合、地元の企業や人とのつながりを作ることが出来ることは大変魅力的であるが、特に導入時期においての作業負担は大きいと考える。様々な点を考慮し検討していきたい。

視察研修先・茨城県小美玉市

視察研修項目・文化事業への住民参画について

報告者・石井美季

茨城空港と百里基地霞ヶ浦を擁する小美玉市は平成の大合併で3つのまちからできました。人口は48000人で恵庭市より少し少なめですが、その一人一人の郷土愛がまちづくりに生かされていると感じました。

小美玉市の「対話の文化」がコミュニケーションの一つの形であるだけでなく、まちと人を同時に育てる大きな力になっていることに感銘を受けました。

文化ホールの利用率の低さの課題をきっかけにしていながら、舞台制作であえてリードしていく発想の転換は目からうろこがはがれ落ちました。住民が面白いと思うものを追求し、行政ともども感性を磨き、対話で人も文化も街も育てていく。人々が面白いと思うから集まり、もっと面白くするためにもっと面白い一因になるために、対話を重ねていく。反対者こそが真剣にまちのためを思っているという解釈からどんどん対話を進めていく。

そうして、行政主導の住民参加型から住民参画の共創の時代を経て住民主体で行政が支援する形へ進化を遂げています。

恵庭市がそっくりそのまま真似をするのはなかなかできないことかもしれませんが、人間性、創造性、美観性を取り入れることは行政にとっても住民にとっても悪いことはないと思うので、今後恵庭市でできることの糸口を探っていきたいと思いました。

視察研修先 栃木県佐野市
視察研修項目・部活動の地域移行について
報告者・石井美季
部活動は様々な教育的意義があり、学校教育において大きな役割を担っていて、しかし少子化や加入率の低下で持続可能性が厳しいというジレンマはどの町においても大きな課題となっていると認識しています。 前に進むしか道はないはずなのに、どのようなバランスで誰が子どもたちと活動をするのか、どう動いても完ぺきな答えが出ないのでなかなか進まないのだろうという認識でしたが、佐野市は一步先に踏み出していました。 休日の活動の半分をとにかく全部移行する、それが佐野市の出した答えでした。少々見切り発車でも構わない、といった潔さを感じました。どちらにしろいつか何か課題は生じるものなのでそれは正しいと思いました。 基本目標と活動目標を明確にし、佐野モデルとして三つの目指すものは、生徒のため、先生のため、地域のためのぶれないしっかりとした方針となっており、その原則にいつでも立ち返ることで推進できているのだと思いました。 恵庭市でも様々な話し合いが行われています。その際に「生徒」「先生」「地域」のどれも突出することなく、大切にすべきことは何か原点を振り返りながら進めていくために参考になることがあると思いますので研究は続けたいと思いました。

視察研修先・栃木県宇都宮市

視察研修項目・デジタル適応支援教室「U@りんくす」について

報告者・石井美季

栃木県の県庁所在地宇都宮市です。その教育センターへ伺いました。仮想空間（メタバース）の子どもたちの居場所づくりですが、視察はオンラインでなく現地へ行くことができて本当によかったです。画面で見える世界は氷山の一角のようなもので、映らない外側での丁寧な仕事に感銘を受けました。

「U@りんくす」では様々な事情で学校へ行けない子どもたちのうち、多様な支援につながれない子たちへ学びの機会の保障と将来の社会的自立を目指すもので学校復帰をゴールと定めていません。しかし心とつながりのサポートを加味した活動を通して、学校へ行こうという意欲につながったり、オフラインで人とコミュニケーションしてみようといった行動につながっているのは凄いと思いました。子どもたちは一日で大きく変わることがある、高いと思っていたハードルを突然軽々と越えられることがあるという可能性を見せていただいたような気がしました。支援員が常に見守り適切な手の差し伸べ方をU@りんくすの世界の中で行っているからこそです。

ひとはそれぞれ得意なことや心が自由になれる場所またはそうでない場所があるのになんとなく「ふつうは」とか「みんなと同じが正しい」あるいは「余計に目立つのはちがう」といったことにとらわれてしまいがちな世の中に新しい考えを許される場になると思いました。より多様な支援の一つとして、このようなメタバースでの子どもたちの居場所づくりは恵庭市でも選択肢の一つとしてあっていいのではと思います。

視察研修先・茨城県小美玉市
視察研修項目・市民協働のまちづくりについて
報告者・早坂 政芳
茨城空港に到着したのはお昼前でした。到着するとまわりは畑が多く、1月下旬なのに雪が全くなく温かい気候に驚きました。小美玉市、3つの町の合併により3つの町の頭文字をとって小美玉市の名前をつけたということでした。名前からダイヤモンドシティと素晴らしい愛称をつけたとのことでした。市の人口は約4万8千人、筑波山が近くに尖って見えて、恵庭岳とよく似ている景観でした。小美玉市では、文化芸術活動が人を育て、心を動かす力があり、対立を「対話」で乗り越える力を養うとの認識で、またそれらが感性を磨き、福祉、教育、観光等の他分野をつないでゆくとのことで、大変文化芸術を重要視しており、その拠点として市の文化大ホールを3カ所も所有しておりました。 それに応じて、住民の参加、住民参画そして住民主体の活動と文化ホールとの関わりが深くなり、文化芸術活動のみならず、他分野においても地域の人々が地域を語る場、創造性を育む場と発展していったとのことでした。そのことにより、地域創造大賞や広報コンクール日本一などの賞を受賞し、文化施設による「行政の文化化」、行政に人間性・創造性・美観性を導入し、硬直化しがちな庁内に新しい風を吹きこんだとのことでした。住民の郷土愛、当事者意識も高まり、5年後10年後の町の姿を「自分事」として考えるようになり、それらが自己肯定感、幸福感をも高めていったとのことでした。 小美玉市では、日本を代表する酪農の里として、特産物のヨーグルト、生乳ソフトクリームを生産とか、ミルク、プリンの生産、全国トップ3のニラ生産、オリンピックの表彰状につかわれた美濃手すき和紙の原料となるトロロアオイの全国シェア7割生産、いばらき組子の生産等と産業の発展にも繋がっていったとのことでした。 恵庭市でも今回、市民会館の改修が実施されます。市民会館、公民館、「えにあす」、「憩いの家」等の公共施設の整備により、小美玉市のように市民活動、行政活動が活発になり、シティプロモーションアワード金賞という専門家たちが選ぶ全国初の表彰で最高位を受賞し、これからの改革も具体的に計画している活気ある状況に、少しでも近づけるように市の行政、特に文化施設の整備及び活況化に貢献してまいりたいと思います。大変貴重な視察となりました。

視察研修先・栃木県佐野市

視察研修項目・部活動の地域移行について

報告者・早坂 政芳

佐野市は栃木県の南西部に位置する人口約11万人で、東京中心部から70kmの圏内で4カ所の高速道路のインターチェンジを有する道路交通の要衝となっている市です。

佐野市役所に到着し、まず驚いたのは7階建ての市役所で説明も7階の部屋で行われました。展望室からは、遠くに富士山も見えて天気が良ければ東京スカイツリーもみえるとのこと。佐野市では中学校の部活動の一部を地域で実施するとの活動について研修しました。

現在の少子化や教員の働き方改革で、中学校の部活動指導において部員が少なくなって一つの中学校では試合形式の練習が出来ないとか、教員の休日時間の確保のために時間が制限されるとの状況がでています。佐野市では学校の教員が担ってきた部活動の指導を地域クラブ活動に移行して、充実した指導と教員の休養時間を確保しているとのこと。です。

地元のアスレチッククラブと契約して、休日の土曜日の半分を学校の指導と交代しながら地域で実施しているとのことでした。スポーツ庁と文化庁は令和4年12月にガイドラインを策定し、これに基づき令和5年度からはじめたとのこと。ほかの一部の地域・自治体でも地域移行が進みつつありますが、学校や地域の実情に応じて進めるようにというのが国の方針となっています。

中学校の部活動設置数の減少は、やりたい部活動が自分の中学にないなど、生徒のニーズに応えられない状況になっており、また専門性や意思に係わらず教師が顧問を務める指導体制の継続は良い環境とはいえないとのことでした。他校の生徒との切磋琢磨も期待できるとのこと。です。

全国的に少子化が進んでいる状況では、地域クラブへの移行は将来的に必要になり、事前に地域の指導者、運営団体、実施主体などを調査・準備することが大事とのこと。でした。運動部だけではなく、吹奏楽部も地域での指導が実施されており、恵庭においても考えていくことが必要だと思いました。

視察研修先・栃木県宇都宮市

視察研修項目・デジタル適応支援教室「U@りんくす」について

報告者・早坂 政芳

宇都宮市は東京から約100km北の距離で、栃木県のほぼ中央に位置しています人口が約51万人と大きな都市で、北西に日光連峰、東に鬼怒川の清流と美しい自然に恵まれています。宇都宮教育センターに到着しデジタル適応支援教室について説明を受けました。

宇都宮市においても不登校の児童、生徒が増加しており、その対策として、デジタルの仮想空間の「U@りんくす」という教室というか、出会いの広場を作成し、子ども達はアバターという自分の分身のキャラクターをつくり、その教室に参加するという、まれで映画の世界を思わせるような画期的な教育でした。これに参加する子供達は約100名の登録者があり、じぶんが参加したい教育やイベントに約20名から30名が参加しているとのことでした。

通常は、各家庭等から参加し友達のアバターともデジタル上で交際ができて、実際に顔を合わせる場も設けるとのことでした。教育センターにスタッフの常駐する部屋があり、参加すれば楽しくなる企画を準備して、子ども達が参加すれば、画面上に連結線が表示され先生との会話だけでなく、友達との会話もできるようになり社会性と教養を身につけることのできるものでした。また保護者からの支持も高く、保護者がどうしたら良いかと悩んでいる状況の助けになっているとのことでした。このシステムとスタッフの常駐の課題はありますが、先進的な教育を研修できることができて大変有意義な研修でありました。